

解説

海舟日記 第九冊

資料番号 94201705

法量 縦一八・〇cm×横一二・八cm 全一〇〇丁(墨付一〇〇丁)

平成十八年(二〇〇六)刊行の『江戸東京博物館史料叢書 勝海舟関係資料 海舟日記(四)』に引き続いて、本年度は「海舟日記」第九冊目にあたる明治三年(一八七〇)十月から同五年正月までの記事を集めた分を翻刻・刊行する。

本冊収録期間の明治四年七月十四日には、廃藩置県が断行され藩体制は解体し、勝海舟が属する静岡藩は足かけ四年で消滅した。廃藩置県の後、政府内における制度改革も進行し(太政官三院制)、旧藩の兵制も中央集権化されていった。条約改正の準備として、西洋の法律・制度・理財などの調査を任とした岩倉遣外使節団が日本を発ったのも、明治四年十一月のことであった。

このような状況下、勝海舟はどのように過ごし、いかなる活動をしていたのか。明治政府や静岡藩との関わりはどうであったのか。

実のところ、明治四年前後における海舟の動向については、これまであまり注目されず、十分に検討されてこなかったように思われる。それは、海舟関係の著作物の巻末などに掲載される関係年譜・年表の類を見ても一目瞭然で、多くの場合、明治三年末から同四年の動向については、特記する記事がないのか、ほとんど記されていない。唯一、

『勝海舟全集』別巻(講談社、一九九四年)に収載される「年譜」(松浦玲氏作成)が、海舟書簡その他を活用して詳細を極めているが、全生涯にわたって細かく記事が採られていることもあってか、明治四年段階における海舟の置かれた状況や立場、活動が見えにくくなっているようにも思われる。また重要と思われる記事が採られていない場合も見られる。

こうした現状を受けて、ここでは「海舟日記」第九冊の書誌情報とともに、明治四年前後の政治的・社会的情勢を視野に入れながら、海舟の活動の特色を意識して、やや詳しく海舟の動向を紹介していきたい。また、その活動や「海舟日記」を通じてうかがえるいくつかの問題点にも言及できれど思っている。なお、本文中で引用した文献は、最低限の情報しかカッコ内に註記していない。出典の詳細は、巻末の〈参考文献〉を参照されたい。

1 書誌情報

本冊は、前冊「海舟日記」八と同様に「金花堂」銘の黒野紙を料紙とし、茶色の表紙を付けて袋綴じされている。表紙には海舟の自筆で「従明治四(抹消し)「三」と訂正」庚午十月廿五日至／同四(抹消し)「五」と訂正」壬申正月十五日」と書かれているが(口絵写真1)、実際は明治三年十月二十四日から同五年正月十五日までの記事が収められている。

本冊でもっとも特徴的なのは、日記の天部に四点の付箋が貼り付け

られていることである（口絵写真3・4・5・6）。いずれの付箋も熊本（肥後）藩や同藩士古莊嘉門ふるしやうの動向を記したもので、海舟の自筆である。後述するような状況から見て、海舟自身が貼り付けたものであろう。なぜこのような措置を施したのであろうか。海舟と古莊嘉門との関係に注目すると、以下のように考えられる。

古莊嘉門は、横井小楠の実学党と対立した学校党の中心人物で、木下犀潭さいたんの門人にあたる。戊辰戦争期において奥羽情勢が切迫してきた慶応四年閏四月以降、同志の竹添進一郎とともに薩摩・長州中心の新政府軍に対抗して、肥後藩と奥羽諸藩との連携を画策していた人物で、ちょうどこの時期に海舟のもとを訪ねたことがあった（なお、肥後藩と奥羽諸藩の連携については、栗原伸一郎「戊辰戦争期の仙台湾と肥後藩」に詳しい）。

その後古莊は、明治二年末から三年にかけての長州藩諸隊脱退騒動にも関与し、捕縛を逃れて静岡在住の海舟のもとを訪れている。この状況は本冊からも判明する。すなわち、明治四年三月二十四日条の欄外記事によると、海舟に庇護を求めた形跡がうかがわれ、それに対して海舟は、庇護を断るものの「通行・潜居候事勝手次第」と述べた。廃藩置県後も古莊の静岡潜伏は続き、一時山岡鉄太郎のもとで生活していたようだが、明治五年に海舟や山岡が上京し、庇護者を失ったことを受けて、ついに政府に自訴し、禁獄三年に処せられた。

ここで問題なのは、捕縛後の古莊が明治五年十一月十日に、司法省臨時裁判所において、自身の潜行と海舟や山岡との関わりを供述した

ことによって、海舟にも累が及んだことである。例えば、古莊は海舟を訪ねたことについて、次のように述べている。

（明治四年）三月廿五日、駿州静岡県下江罷越、同所ニ潜伏可致ト、同所鷹匠町に住居いたし候兼而之知己同県士勝安房江便り面会いたし、白地マニ事情ヲ申聞、潜伏者差支可申哉与相尋候処、安房打笑ヒ、心配ニ者不及、尤宅ニハ難差置候得共、山奥江潜ミ居候様申聞、駿州阿部川ノ奥梅ヶ島与唱候場所者温泉有之、究竟之土地ニ付、同所江罷越湯治人之積ニ而潜伏致候様差図ニ付、直ニ同所江罷越潜居候

（綿貫哲雄「維新前後の国事犯（二）」引用の「古莊嘉門一件書類」による。以下、古莊一件の記述で特に断らない場合は同書による）。

これを受けた司法省は、海舟へ事情聴取に及んでいる（「海舟日記」第十冊、明治五年十一月十三日・十八日条）。結論からいって、本冊の付箋は、聴取された海舟が、記憶をたぐり寄せながら付けたものと判断できる。これを裏付けるものが、口絵写真3に掲載した付箋である。海舟宅を訪れた月日について、古莊は前掲の引用史料のように、三月二十五日と供述しているのに対し、海舟は本日記三月二十四日条の欄外記事を根拠に、「布留庄突然来訪、月日当人申口とは相違、三月廿五日ニハ無之」（傍点筆者）と付箋に記し、貼り付けているのである。

「熊本県士来訪」という付箋（口絵写真4・5）は、古荘が海舟宅を訪れたことを指すのかも知れない。ちなみに古荘は、明治四年四月五日に海舟宅を訪れたことを、以下のように述べている。「同四月五日、右安房方江立戻、猶一身之措所を依頼候処、私身分之始末者同県士山岡鉄太郎江相咄置候間、同人方江罷越可引合旨申聞候故、翌六日鉄太郎方江罷越、初而面会致候」。ただ、海舟の付箋は、古荘が述べた四月五日条にはなく、五月五日条に貼られている。あるいは五月五日には、古荘とは別の熊本藩関係者が訪れた可能性もある。というのは、後年の海舟談話（明治三十年九月）によれば、熊本藩の御用として、古荘を捜しに安場保和が海舟を訪れたこともあったという（『海舟語録』）。ただこれは、海舟七十五歳の時の談話であり、しかも事件から相当年月が経っていることから、そのまま受け取ることではできないだろう。「海舟は正確に記録することが得意ではない」「海舟は記録することが下手で、日記や手紙の日付など、ごくごく単純なことで間違いが多い」と、松浦玲氏は近著『勝海舟』（筑摩書房、二〇一〇年）で述べられたが、古荘一件の記述と付箋も、海舟の記録と記憶の問題を考えるうえで、ひとつの素材となりうるだろう。

口絵写真6の付箋は、明治四年十二月十二日条やその欄外記事に対応したものである。この日海舟は、もと熊本藩知事の細川護久を訪ね、明春の細川護美（護久の弟）の留学など雑話に及んでいる。この雑話のひとつが、欄外に記された古荘一件であろう。欄外記事からは、海舟が古荘の処分について、なにがしか尽力した様子がうかがわれる。

なお、付属文書③として口絵写真10で紹介した文書は、これまで紹介してきた付箋と一連のものである。この文書には、もと熊本藩大参事細川護美（良之助）から来訪を乞う書状があったことが書かれているが、これから判断すると、明治四年十二月十日条「長岡元良之助殿へ一封、近日来訪すへき旨也」が対応するであろう。これを受けて海舟は、十二日に護美の兄護久を訪れたのである。したがって、付属文書③は、本来明治四年十二月十日条の天部に貼り付けられていた付箋と判断される。

2 海舟の立場と居所

さて、本冊の内容について具体的に見ていく前に、明治三年（一八七〇）から同五年初頭までの間、海舟はどのような立場であったのか、またどこにいたのか、簡単にまとめておきたい。

まず静岡藩との関係であるが、明治二年末に幹事役を退いた海舟は、藩の役職にはついていないものの、知藩事徳川家達らからの依頼もあって、同三年以降も非公式に藩政上の相談にあずかっていた。

海舟は、明治二年十一月に兵部大丞に任命されている。しかし、海軍関係ならば良いが、兵部は不案内としてその就任を断り、明治三年六月十二日に依願免官となった。ただし同日、「御用有之東京滞在被仰付候事」と達せられ（『百官履歴』一）、非役ながらも政府と関係を持つていたようである。海舟が公職につくのは、明治五年五月十日、海軍大輔に任命されたことによってであり、これが海舟の政府初出仕

であった。

それ以前は、藩や政府の役職にもつかず、いわば一人としてあつたわけで、従来注目されてこなかった理由も、この点に求められよう。つぎに、明治三年末から同五年初頭までの海舟の動きを、簡条書きにして示した（典拠を示していない場合は本冊から）。

明治三年

閏十月 五日 政府から日数十五日の御暇を許される

十日 東京出立

十四日 静岡到着

（駿府城近くの鷹匠町一丁目に海舟宅がある）

十一月 六日 御暇日延べ願いを許可する書付が海舟のもとに

届く

十二月二十五日 東京滞在の御用を免じられ（『百官履歴』一）

長期にわたって静岡に滞在する

明治四年

八月二十二日 東京より海舟へ御用召状が届く

二十八日 静岡出立

九月 三日 東京到着

十二月 十二日 西郷隆盛に帰郷のことを相談

（岩倉使節団の外遊中、西郷は留守政府の中心）

二十一日 西郷から帰郷の許しを得る

十二月二十六日 東京出立

二十九日 静岡到着

概して、明治三年末から四年八月までの約十カ月間を静岡、明治四年九月から年末までの約四カ月間が東京で、明治五年の新年を静岡で迎えている。海舟の活動自体は、静岡と東京とで大きな違いがあるわけではない。

なお、ここで、東京における海舟の居宅と、明治三年末に帰郷した私的事情について付言しておきたい。

東京の居宅については、のちに氷川小学校（平成五年廃校）の敷地となった赤坂氷川町の屋敷がよく知られているが、これは明治五年五月以降の居宅である。

それ以前は、明治元年末以降しばらくは、赤坂にあった和歌山（紀州）藩邸内の長屋を拠点としたが、明治三年閏十月頃は牛込若宮（現在の牛込橋付近）にあった静岡藩権大参事・公用掛の妻木頼矩屋敷内に新規別棟を建てて住まいとしたようである（『海舟日記』明治三年十月二十九日、閏十月四日、同月六日条。以後、本冊分の『海舟日記』を典拠とする場合は、適宜10/29、年を入れる場合は3/10/29のようにかっこ内に記す）。

この引越は、赤坂和歌山藩邸に住んでいた天璋院（篤姫、十三代将軍徳川家定御台所）が、明治三年八月十一日に、牛込の戸山邸（もと尾張藩邸）に移転したことに関係があるかも知れない。二年後の明治五年九月、天璋院は徳川家達（廃藩後の明治四年九月以降、戸山邸に居住）とともに赤坂福吉町邸（もと相良屋敷）に再度引き移るが、

海舟はすでに明治五年五月に、相良屋敷の近所にあたる赤坂氷川町に居を移している。相良屋敷の譲渡についても、海舟が交渉していたことを考えあわせると（『海舟日記』第十冊、明治五年四月十七日条ほか）、明治初年における海舟の居所は、天璋院・徳川家との関わりを視野に入れたほうが良さそうである。

つぎに、明治三年末の帰郷についてであるが、海舟の家族は、すでに徳川家の駿河移住に従って東京を離れ、静岡の鷹匠町一丁目に移住していた（『海舟日記』第七冊、慶応四年九月四日条）。東京に何かと所用があつた海舟は、鷹匠町の居宅を留守にすることが多かったが、ようやく明治三年末に帰郷したことになる。

その理由は、明治三年十一月二十七日付の松平慶永宛書簡に、「私事も省婦墓参願御許容に相成」（『勝海舟全集』二）とあるように、前年死去した母のぶの墓参りが目的のひとつにあつた。事実、海舟は帰郷した翌閏十月十五日、母の眠る蓮永寺（静岡市葵区沓谷）に出向き、その後、父母の墓碑を同寺に建てている（父小吉は同寺に埋葬されていない）。撰文は海舟、書は静岡学問所五等教授の山本堯直（眠雲）があつた（4/2/12、2/14）。碑銘については、福田敬業（万屋兵四郎）や妻木頼矩も相談にあずかっていたようである（4/1/12、2/11）。

3 旧幕臣家の存続

静岡在住の海舟が、旧幕臣と頻繁に関わったことは当然であるが、

注目すべきは、戊辰戦争で当主を亡くした旧幕臣家の支援を行っていることである。特に箱館戦争で戦死した遊撃隊士岡田斧吉の跡を自身の四男七郎（義徴）に相続させていることは、目を惹く（3/11/7）。この措置は、斧吉の兄瀧村小太郎（家達付家扶）が、海舟に依頼したことが直接の切っ掛けであつたが、岡田家はもともと蘭学修行に励んでいた頃の海舟の親友岡田新五太郎（勘定出役・海防掛）の家である。新五太郎は、安政期に長崎海軍伝習に臨んだ海舟の留守宅をあずかったことでも知られている。松崎慊堂の門人で、「博覧強記」の新五太郎に対し、海舟は尊敬の念を示していた（『海舟日記』第一冊、文久二年十一月十六日条）。この親友新五太郎の家を四男七郎に継がせることで、海舟は岡田家の断絶を防いだのである。慶応二年（一八六六）十月十日生まれの七郎（母は小西カネ）は、明治三年段階ではまだ数え五歳。家政を取り仕切る力はないので、海舟が後見役となったことは言うまでもない（矢口祥有里「岡田家のその後」）。

ちなみに、新五太郎と同様、慊堂門下で万延元年（一八六〇）に和歌山藩に出仕した渡辺魯輔の名も、本冊に二度登場する。海舟と魯輔とは、新五太郎を介した古い友人であつたと考えられ、魯輔は明治四年十月四日に、西周の塾生荒木卓爾の海外留学について、海舟に斡旋を依頼し、同年十一月二十二日条にみえる海舟の西周宛書簡にも関わった。ちなみに、荒木はすぐには留学できなかったようで、『公文録』第二百二巻によれば、留学できたのは明治十七年、私費でドイツに渡り法律を学んだ。

旧幕臣家の存続に話を戻すと、海舟は衝鋒隊隊長（歩兵頭）の古屋佐久左衛門（箱館戦争で戦死）や彰義隊士伴門五郎（上野戦争で戦死）の名跡相続などにも関わり（3/11/25、11/29、4/2/18、8/21）、蟠龍丸の艦長として箱館戦争を戦い、降伏後、西丸の獄舎で死去した松岡磐吉（盤吉とも）の家族へ、扶持を与えることにも関与した（4/9/19）。金銭支援が二〇〇両と際だっている友成登とは（3/12/3）、あるいは上野・飯能・東北などを経て箱館戦争を戦い、戦後は陸軍省に出仕し、明治十四年に榎本武揚や松平太郎が経営する北辰社に入社、酪農に従事した友成安良（郷右衛門）に関係する人物であったかも知れない（山崎有信『幕末血涙史』）。その他、酒田で降伏した沼津病院付属の小林文周（重賢）に四十両、もと遊撃隊頭取三橋虎蔵（伊庭八郎の従兄）の母に二十両をそれぞれ遣し（4/10/20、12/12）、前冊同様、もと会津藩士の林惟純^{これすな}を通じて、斗南藩士が静岡藩に金子を無心してくると、大参事浅野氏祐に相談に及んでいる（4/2/24、3/7、3/8）。

戊辰戦争期の海舟は恭順を主張し、徹底抗戦に批判的であったとはいえ、徳川のために戦い、死んでいった者やその家族を見捨てることは、決してなかったことがうかがわれよう。

4 資金の運用

戊辰戦争に関係した者だけではなく、時勢の変転とともに困窮を余儀なくされた旧幕臣の救済も、前冊から引き続いて行っている。例え

ば、「究迫」のため助力を乞う原田五郎左衛門に五十両、「合力」を求める岡田清右衛門に三十両を渡していることなどが、それに該当しう（4/7/13、9/10、9/12）。

注意すべきは、こうした資金援助を海舟が勝手独自に行っているのではなく、静岡藩首脳部が合意したうえでなされていることである。

原田への援助は、権大参事・政事庁掛の浅野氏祐に相談しているし、金銭は権大参事・郡制掛の織田信重から受け取っている（4/7/13、7/21）。岡田に援助したことは、権大参事・軍事掛の服部常純に話した（4/9/11）。金銭を受け取る側の立場によって、相談相手が異なってくるものと想定されるが、いずれにしろ海舟の独断ではない。

また、本冊で注目できるのは、海舟が徳川家から相当高額の資金を預かっていることである。例えば、知藩事徳川家達付の家令である溝口勝如から五〇〇両、一〇〇〇両、三〇〇両（3/閏10/20、11/晦日、12/13、4/6/21、10/3）、服部常純から五〇〇両（4/9/29）、浅野氏祐から五〇〇両（4/12/19）といった具合である。

こうした預かり金は、海舟に直接下賜された資金（例えば3/12/27、12/28、4/8/24、8/26）とは区別される性格のものであるう。

この点、松浦玲氏は前掲『勝海舟』において、海舟が生活困窮者に与えた資金は、当初は個人的支出であったが、海舟が私的に支援していることを知った徳川家が資金を融通してくれるようになり、明治三年以降は、徳川家から廻ってくる資金を運用して援助を行っていたと指摘した。これを踏まえれば、高額資金の預かりは、生活困窮者に

分け与えたり、後述する旧幕臣子弟の学資金などに活用された運用金であったと考えられる。徳川家から直接支援することは、何かと問題があるが、藩の役職にもついていない私的な立場の海舟であれば、資金を運用するうえでも都合であったのだろう。

私的な立場といっても、海舟自身の生活は静岡藩（徳川家）からの給金で賄われていたことも、本冊より確認できる。明治三年閏十月十六日条には、「身分御手当之事、四百両と申立る、知事殿江参、五六ヶ条申立」とあり、十一月十六日条に十一・十二月分の給金一〇七両余が、明治四年二月二日には二ヶ月分給金二五〇両、六月八日には六月から九月までの分一三三両余、などと記されており、これが自身の生活費に相当していたと思われる。

5 教育支援と人材育成

幕末以来、海舟が一貫して主張・実践していたことのひとつとして、若者の教育支援と育成とをあげることができる。ここでは、本冊からうかがえる旧幕臣子弟や諸藩関係者の静岡学問所入校の様子や東京遊学の実態、さらには海外へ飛躍しようとする若者たちへの支援などについて、具体的に見ていきたい。

(1) 静岡での学問修業

明治元年（一八六八）十月に駿府城内に開設された静岡学問所は、漢学・国学・洋学（英・仏・蘭・独）の三つを兼ね備えた教育機関で

あり、旧幕府開成所や横浜の語学学校などの教師や蔵書を引き継いでいたこともあって、充実した教育内容を誇っていた。何といつても学問所頭に任命されたのは、当時最先端の知識を有していた向山黄村と津田真道であった。

本冊からは、旧幕臣子弟と思われる太田忠二郎・海野貫一郎・藤田一郎の静岡学問所入校（ $4/3/2$ 、 $3/9$ 、 $3/12$ 、 $3/29$ 、 $4/1$ など）と、彼ら三人への海舟の金銭（修業料）援助（立替）が目につく（ $4/4/7$ 、 $4/10$ 、 $4/晦日$ 、 $5/1$ 、 $5/28$ 、 $6/28$ など）。太田と藤田へはおもに月六両、海野へは月三両を海舟が立て替えていた。太田は、静岡学問所二等教授の長田銈太郎（仏学）へも入門するが（ $4/3/23$ ）、廃藩置県後の八月五日、藤田とともに東京遊学について海舟に相談し、八日には出立暇乞いに参上、四月から八月までの五カ月分の修業料立替分三十両を海舟に返済した。ただ、東京で学問修業する太田・藤田に対し、海舟は十兩ずつを貸与し、今度は返金しなくても良いようにと、権大参事の服部常純に相談している（ $4/9/22$ ）。前述のように、この貸与金も徳川家からの預かり金から支給されたものであろう。

太田忠二郎のように、静岡学問所に入校しながら、同所の教授が開設していた私塾で学問修業に励む者も散見される。例えば、下山良太郎は静岡学問所一等教授（漢学）の望月綱の塾に（ $3/11/25$ ）、松平三郎は同所一等教授の中村正直（漢学）塾に（ $4/3/16$ ）、それぞれ入塾している。下山はその後、静岡学問所の英学教師の欠を埋

めるために沼津兵学校から転任してきた蘭鑑そのかんに師事し（4／5／19）、ついで静岡学問所和蘭学・独逸学教授であった中川忠明にも入門するが、結局退塾し（4／8／8）、最終的には東京へ遊学するに至った（4／9／9）。

全国屈指の教育機関を抱える静岡藩は、諸藩の注目の的でもあり、静岡学問所に入校するか、あるいは同所教授の私塾に入門したいと願う諸藩士が相継いだ。本冊からは熊本藩の平塚恰（4／1／9、1／13）、福岡藩の石田新六郎・安川敬一郎（4／1／14、7／9）、中村藩の八景又六（4／2／16）などの名前が見出せる。その他具体的な名前は解らないものの、柳河藩・名古屋藩・西大平藩などから子弟の遊学希望が見られた（3／閏10／5、4／2／22、2／25）。

また、もと藩主やその子弟が静岡遊学に来ていることも興味深い事実である。本冊からは、豊後森藩知事久留島通靖の弟通簡みちひろ（十三歳）、柳河藩知事立花鑑寛あきもとの長男鑑良あきよし（十五歳）、秋月藩知事黒田長徳（二十四歳）の遊学が確認できる（4／10／6、10／21、11／14、11／15）。

具体的な様相は次冊以降に詳しいが、例えば立花鑑良の場合、遊学中に熱病に冒され、明治六年正月七日に十六歳の若さで死去した。そのため海舟は、「立花従五位（鑑良）病死之為知しらせ、此人良質、學術甚勉励、行先ニ望み有りしか真ニ可惜」（『海舟日記』第十冊、明治六年一月十二日条）と、前途洋々たる鑑良の死を惜しんだ。黒田長徳の場合、当初は海舟個人に入塾することを希望しようだが、東京・静岡間を往復する可能性がある海舟は断固拒否し、結局静岡学問所に入校

することとなる（4／10／9、10／11、11／14、11／15）。

入塾とえば、海舟は静岡に居住している水戸藩士（4／2／2欄外にある河西辰次郎・松延喜彦と思われる）の自身への入塾も断り、静岡学問所への入校を斡旋している（4／2／4、2／5）。

ただ、この水戸藩士は必ずしも遊学ではなく、旧幕臣の駿河移住に従って、静岡にやって来た者かもしれない。というのも、かつて元治元年（一八六四）の筑波拳兵に関わり、天狗党幹部のなかで唯一生き残った岩谷敬一郎という人物も、徳川家の駿河移住に際して、海舟や大久保一翁・山岡鉄太郎らを頼って同地に引き移り、明治五年段階で静岡県貫属となり、佐野郡黒田村（現掛川市）の郷士の養子となつて、近隣の児童に「仏学」教育を行っていたという事実があるからである（『静岡県史』資料編16 近代編一）。

また、本冊にも三度登場する西野三郎（3／11／3、4／1／晦日、3／5）なる者も、水戸出身者でありながら、静岡に居住していた人物であった。西野は、戊辰戦争の際、官軍と偽り上総国大多喜で金策活動を行うも、徳島藩家老の稲田家に捕縛、赦免後は強盗の嫌疑が掛かったため、山岡鉄太郎を介して静岡藩開墾掛頭の中条景昭の付属となっていた。海舟は、西野のような者へも金銭援助をしているが、西野が静岡に居着くことはなく、明治五年過ぎには東京に出て、もと新徴組隊士の村上恒右衛門とともに、伊豆式根島開拓を出願していった（前掲『静岡県史』）。

いずれにしても、静岡藩には山岡や中条景昭のように攘夷派にして

剣術の達人もあり、その多くが開墾に従事していたこともあって、行き場のない水戸浪士のような者までもが、どさくさに紛れて居着いていたことがわかる。静岡藩と言えは、最先端の学問と知識とを有した近代的な側面を評価しがちであるが、それだけではなく、幕末以来の志士の側面を有した面々も抱えていたことを改めて認識させられる。

こうした多様性を踏まえてこそ、当該期における静岡藩の存在意義を評価できるのであり、海舟はそれぞれが持っている個性を個性として受け止め、全否定することなく、彼らの生き方に支援を惜しまない度量の大きさを見せていたのであった。海舟が徳川家の資産を運用していたことからすれば、こうしたことは徳川家の方針と位置づけることも可能であろう。

(2) 集学所と鹿兒島

静岡藩の持つ志士の側面を代表した場が、集学所における武人教育であった。集学所とは、もと遊撃隊士にして戊辰戦争の降伏人であった人見寧や梅沢敏・和田助三郎らが、鹿兒島遊学によって、同藩の質実剛健的な気風に共感し、静岡でも武人教育を実践しようと、海舟の支援のもとで有渡郡大屋村にある大正寺を借り受け、開設した学校のことである。のちに大正寺から同郡久能村に移転願いを出し(4/8/20)、大正寺の火災により(4/9/27)久能に引き移り、廃藩後は静岡浅間神社北側の惣持院を拠点とした。同所では漢学・英学・仏学・数学を教授し、仏式陸軍の撃剣も重視していた(「人見寧履歴書」)。

集学所に関わった者では、高橋弥吉・幕内幡次郎・多田為之助ら、もと遊撃隊士が多かったが(3/12/23、4/1/6、3/2ほか)、諸侯クラスの人物も関与していたようである。本冊からは、全藩的な廃藩前の明治三年十月に藩を廃した、もと長岡藩知事牧野忠毅^{ただか}と思われる人物が、人見寧のもとに同居していた(4/1/5)。

独自の出版計画もあったようで、和田助三郎は普仏戦争に関する図書の出版を海舟に相談している(4/8/10)

志士の性格を持った人見のもとには、政府転覆を目論む米沢藩士雲井龍雄も訪れ、時事を談ずるなど、時には政府から嫌疑を受ける場合もみられたが(「人見寧履歴書」、人見は単純な攘夷論者ではなかった。人見は中村正直(静岡学問所一等教授)や矢田堀鴻(権少参事)とともにE・W・クラーク(米国人)の静岡学問所招聘に関与している(4/8/24)、和田助三郎もクラークの受け入れ契約などに関

わっていたのである(4/9/20・10/9)。

クラークの静岡学問所招聘については、本冊から詳細にうかがうことが出来るが、明治三年閏十月に、海舟と中村正直が教師のことで種々相談したことが発端であった(3/閏10/27)。当初は、教師を英国人にするか米国人にするかで揺れていたようだが、中村が「教師の目的のみならば米利堅人可なるべく、天子・諸侯其外国政之鈞合を以て言へば英人可なるべし、…英公使に頼めば、かのパークス必ず喜び周旋を致すべし、しかし彼必ずたかひものを押し付け、物入りがふゑ可申也」(「勝海舟全集」別巻)と述べたように、結局英国人となら

ず、米国留学中の長男勝小鹿の教師で、かつ福井藩御雇となったW・E・グリフィスの斡旋により、米国教師に決定した(3/11/27、4/6/15)。このうち海舟は、松平慶永や福井藩士、さらには幕末期に関わりを持った神奈川通詞で、英語教師として福井藩御雇となった太田源三郎(資政)らを介してグリフィスと交渉し、結果クラークの招聘を実現させていくのである(4/8/25、9/24ほか)。クラークは明治四年十月二十四日に静岡に到着(4/10/28)、明治五年七月に駿府城内に西洋式住宅が築かれるまでは、海舟の母のおの墓がある蓮永寺を住まいとした(4/8/22、5/1/6)。

このようなクラーク招聘に、人見も関与していたことが本冊からわかる。人見が外国語教育に理解を示していたことは、集学所での教育内容からもわかるが、クラークが明治七年に開成学校教師となり上京すると、静岡における英学教育が廃れていくことを憂え、海舟に教育の継続を歎願し、新たな教師を招聘していったことから、十分に裏付けることができる(「人見寧履履歴書」)。

ところで、人見寧が鹿兒島藩の気風に影響を受け、集学所を開設したように、明治初年における静岡藩と鹿兒島藩とが極めて近い間柄にあったことは、十分に注意する必要がある。

前冊でも、鹿兒島藩士の最上五郎や種子田精一らの静岡遊学や、海舟の支援により海外留学を果たす河上醇・黒岡帯刀らを確認したが、本冊においても、鹿兒島藩関係者との交流は頻繁であったことがわかる。

例えば、海舟は大山綱良より高崎一揆の風聞を聞くだけではなく、知藩事徳川家達から大山へ相州秋広の短刀および服料五十両を下賜することを取り計らっているし(3/12/24)、また、村田新八から島津久光と西郷隆盛が上京するという情報を得ると、家達から村田へ国光の短刀が送られているのである(4/1/22、1/23)。

知藩事から短刀が下賜されるとは、並大抵の関係ではあるまい。鹿兒島へ遊学する静岡藩士が多かったことも背景にあらうが、維新の戦いで敵同士であったとは思えない親密な交流である。西南戦争の際、海舟および静岡藩関係者の動向が政府から注視され、海舟が薩軍に資金援助をしたという嫌疑をかけられたのも、この時期の関係を踏まえれば、十分に納得しうるのである。

(3) 東京遊学と佐久間貞一

静岡での学問修業に満足できず、東京遊学を希望する者へも海舟は支援を怠らなかった。前述した太田忠二郎や藤田一郎への金銭援助もそうだが、本冊からは、独逸学の今井太郎、漢学の海上一造、英学の依田安三郎(もと講武所奉行支配)、同じく英学の大岡斧太郎(もと溶姫付見習)らの名前も見出すことができる(修学内容については『明治初期静岡県史料』第四巻参照)。倉沢剛『幕末教育史の研究』三によれば、いずれも大学南校で学んだとあるが、南校入校については、今井太郎のみ本冊から確認できるものの(4/5/23)、他は不明である。樋口雄彦『静岡学問所』が指摘するように、私塾経営者に学ん

だ可能性も否定できないだろう。この点、東京で漢学塾を開設する安井息軒（仲平）に入門した佐久間千三郎は、その一人といえる。

佐久間千三郎とは、のちに大日本印刷の前身である秀英舎を創設した佐久間貞一のことである。「秀英舎」の看板を揮毫したのは海舟であつたようで、関わりも深い（豊原又男『佐久間貞一小伝』）。ここでは、本冊とともに、佐久間の伝記などを参照しながら、佐久間の足跡を少しばかり振り返ってみよう（以下、註記がない場合は『佐久間貞一小伝』より）。

本冊に佐久間の名が初めて出てくるのは、明治三年十一月十四日条であり、以下同年十一月二十日、十一月二十五日、翌四年七月十六日、同月十七日と五回登場する。ただ注意したいのは、海舟は日付だけではなく、人名を正確に書くことも苦手であつたようで、初出から正確に書くことは稀で、何度も登場してようやく正しい表記になるということである（この点は、「海舟日記」を解読する際に注意を要する点であり、後の表記のほうが正しい場合が多い）。佐久間の場合も、「佐々木巳三郎」（3/11/14）、「佐々木子三郎」（3/11/20、11/25）と誤記したのち、ようやく「佐久間千三郎」（4/7/16、7/17）と正確に記している。佐久間が掛川勤番組（3/11/14）として保田久成（掛川小学校頭取）に師事していたこと、のちに東京の安井息軒塾に入門（3/11/20欄外）していることからして、「佐々木巳三郎」「佐々木子三郎」も同一人物としてよい。

維新前の佐久間は、江戸で漢学塾を開いていた小橋橘陰（讃岐国の

尊攘派小橋安蔵の弟）のもとで学び、慶応期には撒兵として二条城守衛を担当、戊辰戦争期には彰義隊とともに上野戦争を戦った。維新後は掛川に居住するが、明治四年十二月に東京の安井息軒に入門し（安井小太郎『故旧過訪録・遊徒及門録』）、その後佐土原行きを志願していった（4/7/16）。この佐土原行きはかつての師匠小橋橘陰に同行したもので、海舟から五十両を受け取っている（4/7/17）。

九州において実業界への転身をはかり、肥後天草島民を北海道浦河に移住させ椎茸栽培をさせたり、和田助三郎（集学所剣道教師）とともに箱館で物産業を営んだり、多才な顔を見せていった。活版印刷業に関わったのは明治九年以降で、掛川で師事した保田久成は共同出資者として関与し、その娘は佐久間に嫁ぐなど、両者の関わりは続いていた。

このように佐久間は、実にさまざまな軌跡を歩んでいったのだが、「海舟日記」からは断片的ながらも、その前半生的一端をうかがい知ることができる。決して詳しい記述ではないが、他の人物についても「海舟日記」上の断片をつなぎ合わせることで、その軌跡の一端を復原することが可能であろう。「海舟日記」には、いまだ歴史の表舞台に登場していない者の足跡が、しっかりと刻印されているわけで、読み手の問題関心如何により、多くの情報が引き出せることは間違いない。

(4) 海外留学の隆盛

国内遊学をさらに発展させ、知見を広げるために海外へと飛躍する者も前冊以降目立っている。海外留学のピークが、明治三年から四年であったことも、見事に対応している(石附実『近代日本の海外留学史』)。海外留学については、国家的指導者を育成する必要があるから、政府も早くから注目しており、なかでも参議大久保利通は皇族・華族(旧大名・公家)の洋行に積極的であった。

洋行する皇族・華族には、同行者として一緒に渡航する者もあり、本冊からは、英国に留学する東伏見宮嘉彰親王(のち小松宮彰仁親王)に随行した河島醇(3/10/25)、プロシアに留学する伏見宮能久親王(もと輪王寺宮公現法親王、東伏見宮の弟)に随行する寺田弘(3/11/25)の名を確認できる。ただし、寺田は「不快」のため同行を見合わせ、出立は明治四年の五月にずれ込んだ(3/12/15、4/4/26)。寺田のプロシア行きを海舟に伝えた最上五郎は、開拓使派遣の留学生として、種子田精一とともに農業勤学のため米国派遣が決まり、遊学先の静岡を後にする(3/11/28)。ここに出てきた名前は、いずれも鹿兒島藩士で海舟とも縁が深かった面々である。

静岡藩士の海外留学については、外務省に出仕した外山正一(静岡学問所一等教授)が、弁務少記として少弁務使森有礼に随行して渡米することが決まると、藩政補翼付属の大儀見元おおぎみもと一郎と木村熊二が、外山に同行する形で渡米を果たした(3/閏10/17、閏10/18)。海舟は、大儀見と木村の留学費を自身の俸金から差し引くなどして、金銭

援助をしている(4/2/3)。この二人はともに、米国の神学校を卒業しクリスチャンとして帰朝、日本におけるクリスト教伝播に活躍していた。

また、明治四年三月には、竹村謹吾(二十五歳)・大久保三郎(十六歳)・川村清雄(二十歳)・小野弥一(二十五歳)・浅野辰夫(十六歳)らが、徳川家の金銭援助のもとで米国留学を実現させている(4/3/8)。横浜を出立したのは三月三日、彼らが乗船するアメリカ船のグレート・リパブリック号には、明治二年に海舟の斡旋により仏国留学が決定しながら、病気により出航できなかった松江藩士の飯塚おとむ納らも同乗し、ようやく仏国行きを果たしていた(高階秀爾ほか『川村清雄研究』)。飯塚は、感謝のしるしか、フランスで撮影した自身の写真を海舟のもとへ送っている(4/9/13)。

このような竹村らの留学にも海舟が関与していたことは、本冊明治四年正月以降の記事からも十分にうかがうことができる(4/1/5、1/14、2/9ほか)。横浜在留のトーマス・ウォルシュ(米国商人)や、ウォルシュが経営する店で番頭をつとめた熊谷(松屋)伊助も、彼らの留学に関わった。大久保三郎の父忠寛(一翁)は、かねてから息子の留学を希望していたこともあって、喜びようは並大抵ではなく、海舟宛てに明治四年正月九日付の書簡を発している。「竹村も大悦にて、早朝より参、一兩日中にも可立位之気込にて難有がり居候、忤(三郎)は実は遣し度は山々にて、何歟に付此事は存出候得共、自兵力に届兼、且は私強て進候計にてもむだと存居候処、此度は真に自分

よりこわく申出、外国人小遣に成候ても宜と申候に付、左候はゞと申に相成候：老人之悦近来に無之」（『勝海舟全集』別巻）。このうち法律と政治学の修養を当初の目的としていた川村清雄から画才を見出し、画業への転向を勧めたのが、既に米国に在住していたかの外山正一であった。のちに外山は、清雄の妹房子と結婚することになる（前掲『川村清雄研究』）。

以上のような静岡藩関係者の海外渡航の多くは、徳川家（静岡藩ではない）や海舟の金銭援助があつてこそ、行われたものであつた。そのため費用が嵩んだ徳川家および海舟は、私費から官費留学へ切りかえようと外務省や文部省などと交渉していった（4/9/16・9/17・9/20・9/晦日・10/1・10/18ほか）。ただし、十分な成果はあがつていない（4/10/25）。

おりしも政府は、学業成績の上がない官費留学生の待遇に頭を悩まされており、学資を負担する大蔵省や留学生の修学状況を現地で実見している外務省官吏を中心に、留学生の整理に着手し始めていた。廃藩によって、それまで藩費留学していた者が官費に切りかわった財政負担も大きく、大蔵省は官費留学生の削減に積極的となつていたのである。こうした状況下であれば、静岡藩子弟の官費切りかえは、極めて現実性に乏しいものであつたといえよう。明治六年末には官費留学制度が廃止され、留学生そのものが激減するに至つた（前掲『近代日本の海外留学史』）。

（5）御貸人の派遣

前冊から引き続いて注目できるのは、静岡藩から諸藩に派遣された御貸人を多く確認できることである。海外留学生同様、明治三年から四年がピークで、四年八月時点で二五六名の御貸人がいたというから、明治初年における静岡藩の軍事的・文化的レベルの高さを物語る。

なかでも明治三年十月、陸軍は仏式に統一すべきという布告が政府から発せられたことで、幕府時代から仏式を採用していた静岡藩陸軍関係者は注目の的となつた（以下、本項で特に註記がない場合は、樋口雄彦『沼津兵学校の研究』も参照）。

まず軍事面では、和歌山藩に派遣された小菅智淵・筒井義信（3/11/11、12/12）、名古屋藩への中川長五郎・大岡忠良・堀江当三（4/2/1、8/17）の名前を確認できる。小菅・筒井はともに箱館降伏人で、和歌山では工兵を教授した。中川長五郎も箱館降伏人で、戦後福井藩御預となり、明治三年二月には同藩の砲兵訓導試験補となり、兵学教授をしていたが（熊澤恵里子『幕末維新期における教育の近代化に関する研究』）、一年後には名古屋に遣わされたことになる。大岡・堀江はともに沼津兵学校資業生で、名古屋藩の兵学校にも関与したようだが、廃藩後の兵学校廃校により戻つてきた。軍事関係ではないが、静岡藩の要職にあつた妻木頼矩（権大参事・公用掛）も廃藩後の名古屋に派遣され（4/6/28）、名古屋県大参事となっている。

また、実現はしていないが、徳島藩では医師や藤沢次謙（少参事・軍事掛）の借用を求めたり（3/12/12、4/1/13、1/20）、山

口藩が仏式伝習者を(4/1/10)、鳥取藩が会計に長じた者を求めた事例(4/2/10)も見られた。山口藩には派遣しないが、鹿児島藩から仏式練兵心得者を求められると、海舟は戸川安愛(権大参事・公用掛)や藤沢次謙に相談し、沼津兵学校より二名の派遣者を決定したり(4/8/1、8/6)、大砲教示者の借用を求められると、早々に藤沢へ話を持ちかけるなど(4/8/15)、山口藩とはスタンスの違いを見せているのも興味深い。もとより海舟の個人的感情のみで、御貸人の派遣が決定されたわけではないだろうが、静岡藩と薩長両藩との距離感の違いを、本冊から明確にうかがうことができるのである。

英学関係では、柳河藩から英語教師を依頼されると(4/4/晦日、5/晦日)、吉村幹(沼津兵学校資業生)が派遣され、もと横浜英学所教師であった太田資政は、福井藩の英語教師をつとめた(4/3/20)。

漢学関係では、弘前藩に宮崎立元(静岡学問所三等教授)が派遣され、池田忠一(同五等教授)も宮崎の弘前行に同行した(3/11/4、4/8/6、8/18)。

以上のように、御貸人の選定・派遣にあたっても、海舟が一定程度の役割を担っていたことが本冊から十分にうかがわれ、正式に藩の役職についていなくとも、海舟は静岡藩の意志決定に影響を与えていたことがわかるのである。

6 廃藩置県と静岡藩

静岡藩における海舟の存在感の大きさは、明治四年(一八七二)七月の廃藩置県に際しても発揮された。

海舟が廃藩置県を知ったのは七月十六日、廃藩置県の詔が発せられた二日後で、知らせたのは権大参事・公用掛の戸川安愛であった(4/7/16)。これを受けて、海舟は藩内の混乱を避けるために発せられる知藩事告諭書の起草に関わり(7/26、8/4)、藩庁首脳部と知事の家禄についても相談していった(8/5)。

廃藩によって、知藩事は東京への「帰京」を命じられ、静岡藩知事の徳川家達も八月二十八日に静岡を出立、海舟も同日静岡を後にしている(8/28)。九月三日に東京に到着し、同月二十七日、家達は徳川家の居所となっていた戸山邸(もと尾張藩邸)に引き移った(「海舟日記」九月二十四条には、九月二十八日に引き移りとある)。

東京に着いた海舟は、参議西郷隆盛を訪ね(9/15)、お互い「其節」に死んでいれば、今日のような苦労はなかっただろうとの思いを共有したようである(前掲「勝海舟」)。十月八日には、同月六日付の書簡を西郷に送ったようだ(10/8)。そこでは、新知事は無理に送ることはしないで、旧藩大参事などで十分な場合はそのままとし、新知事は国内が一定せず紛糾しているところから任命すべきだと主張し、「無理」は却て風化之妨を生、或は化育に於て遅々を生可申」と論ずるなど、状況を見極めたうえでの改革を求めている(「勝海舟全集」二)。

結局、十一月までは旧藩大参事が残務処理にあたり、それ以降新人事が発令される。静岡県の参事となったのは、旧藩出身の大久保忠寛と浅野氏祐、もと岡山藩大参事であった香川真一であった。ただし、大久保は参事就任を断り、結局罷免となる(11/24、12/10)。こうしたなかで海舟は、静岡県権参事に任じられた長沢常山(もと日出藩権大参事)が県地に向け出立する前日、これまでの内情を長沢に話すとともに(12/20)、自身が帰郷したのちも戊辰以来の趣旨について種々教示するなど(5/1/7)、新時代を迎えた静岡が、必要以上に混乱しないようにと気を配っていくのであった。

廃藩置県によって、旧藩首脳部の立場も大きく変わっていった。例えば、海舟に廃藩置県を伝えた戸川安愛は、新県への引渡御用が済んだ明治五年正月朔日、海舟に帰農のことを相談し(5/1/1)、同月十二日には辞職の願書を浅野参事へ提出している。当初、海舟は安倍郡門屋村の隠宅を戸川に貸す約束をし、一緒に見分に赴くものの(5/1/1、1/3)、結局戸川は、旧領備中国に引き移り、窪屋郡羽嶋村に帰農、同地において私塾を経営し、子弟教育に従事していった(「戸川伊豆守小伝」)。帰農金として家達より二〇〇両を下賜されている(5/1/14)。

権大参事・郡制掛をつとめた織田信重については、海舟が西郷隆盛に「遠州採用」を相談していたように(4/12/12)、一時額田県への出仕が決まったようだが、最終的には浜松県に出仕した。なお、名古屋県大参事となっていた妻木頼矩も免ぜられ、明治五年には須崎村

(墨田区向島か)で料理店を開業し、新たな道を歩んでいった。その後、横浜毎日新聞の主事になる(前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』第三編)。

また、静岡藩の役職についていたわけではなかったが、徳川家に従って静岡に住みつき、明治三年二月には終身同居を許されていた(橋本政次『姫路城史』下)もと姫路藩主の酒井忠績(閑亭)の軌跡についても言及しておこう。

忠績には、ともに住みついた忠悰(楽堂、忠績の後の姫路藩主)とともに、姫路から年二〇〇俵の生活費が支給されていたようだが(4/5/7)、廃藩後の明治五年段階では静岡観音町に居住し、あるうことか、絹布の織物売る商法に手を染めていたことがわかる(前掲『静岡県史』)。忠績といえ、最後の大老をつとめた幕府の大物である。数年前までは考えられもなかった境遇の大転換を、どのような思いで受けとめたのだろうか。

7 徳川家との関係

廃藩置県によって、知藩事および海舟が東京に出てくると、海舟は東京を舞台に徳川家の人々としはば交流していった。

よく知られているのは、十三代將軍徳川家定の御台所であった天璋院(篤姫)との親密な交流である。天璋院との関わりについては、後年の海舟の談話がよく知られているが(『海舟語録』、本冊からも天璋院と同行して、東京の下町を闊歩する海舟の姿を見出すことができ

る（4／10／27、11／23、12／18）。天璋院は海舟を余程気に入ったようで、明治四年末に海舟が帰郷するにあたっては、餞別を贈るだけではなく（4／12／25）、静岡滞在中の海舟に「御早ふ当地（東京）へ御帰り被成候やうにと、日々御待申居まゐらせ候」と、帰りを待ちこがれる手紙を送っていた（『勝海舟全集』別巻）。

心を掴んでいたのは天璋院だけではない。本寿院（家定生母）や実成院（家茂生母）といった徳川家の奥向からも頼りにされていた海舟は、これ以降も徳川家政に大きな影響力を持っていたのである（4／11／23、12／11）。

徳川家に対する影響力という点では、徳川慶喜との関係においても同様であった。慶喜は、すでに明治二年九月二十八日に謹慎を解除され、宝台院からもと駿府代官屋敷（紺屋町）に引き移って、新生活を始めていた。明治五年正月六日には従四位に叙せられ、名誉回復の第一歩を示していく。

この間、同四年六月二十九日には長男敬事（母は新村信）が誕生し、九月八日には次男善事（母は中根幸）も生まれている。長男の名は海舟による選定で（4／7／5）、次男も海舟が名付け親となった可能性もある。前將軍の男子の名付け親となった海舟の立場は、そのまま徳川家政における影響力を反映しているよう。

そのうえ、明治四年十月以降、上野・芝にあった徳川將軍家靈廟の整理に関与していることも（10／8、10／10、10／12、10／18、10／19など）、海舟が徳川家内で絶大な影響力を持っていたを示すに足る

事実といえる。御霊屋整理については、永峰弥吉・梅沢敏ら、もと遊撃隊士で静岡藩集字所に関わった志士的面々も関与していることも興味深い（4／12／3）。

8 出版活動

いまは亡き友人の家を、自身の息子に継がせることで断絶を防いだ海舟の姿は、前述したとおりだが、亡き師匠や知友の遺稿に序文を寄せ、その出版に尽力し、彼らの偉業を後世に伝えることで、供養にかえる行為も明治四年末以降の海舟は行っている。本冊には、佐久間象山『省儉録』と鵜殿団次郎『万国奇観』の出版に尽力した様子が書かれている。

象山は、海舟の師匠にして、妹の順（順子・瑞枝）の夫であったこととよく知られている。象山暗殺後の海舟は、『蓋世之英雄』の死を嘆いていた（『海舟日記』第四冊、元治元年七月十二日条）。鵜殿は長岡藩士でありながら海舟の招聘により幕府軍艦役となり、戊辰戦争では海舟とともに恭順活動を展開したことで知られている。西郷隆盛からも一目置かれる存在だったというが、明治元年（一八六八）十二月九日に死去した。

さて、『省儉録』とは、嘉永七年（一八五四）四月に、象山が吉田松陰の密航事件に連座し投獄されたのち、獄中で腹案を練っていた記録のことで、完成したのは出獄後の安政二年（一八五五）になってからである。子孫への教訓として書かれたもので、世間に公表するつも

りはなかったようである。海舟は、この遺稿を出版して、象山の事績を世間および後世に伝えることに尽力したのである。そもそも「省書」とは過ちを反省するという意味だが、反省しているのは標題だけで、内容は象山の自負と使命感とに満ち溢れていた。まさに象山の性格と思想とを余すところなく伝える格好の書である。折しも前年の明治三年には、生前の象山が、その奇行ぶりに頭を悩ませた甥の北村安世が、実母の蕙（象山の姉）を「発狂」のすえに殺害するという悲劇が起こっており、その知らせは一年後に海舟のもとに届いている（4/9/10）。このような時期に出版計画がなされるのも、何かの巡り合わせといえようか。出版には中村正直や木村喜毅、福田敬業（万屋兵四郎）らが関与していくが（4/6/12、9/12、11/13、11/20、12/23など）、このうち福田は、海舟の依頼で幕末期に開成所版『万国公法』や海軍所版『大日本沿海略図』を出版するなど、海舟と縁が深い人物であった（高原泉「開成所版『万国公法』の刊行」）。

また、『万国奇観』とは、鶴殿団次郎編訳で同郷の小林虎三郎（病翁）の校正にかかるナポレオン、ピョートル、ワシントンの評伝である。団次郎の弟で米国留学中の白峰駿馬（もと海援隊士）は、すでに前年、兄の遺稿出版を海舟に願ひ出て、彫刻料も支払っていた（『海舟日記』第八冊、明治三年八月十八日・二十四日条）。海舟のもとに鶴殿の遺稿を持参してきたのが、東京遊学中の今井太郎と藤田一郎であったことも興味深い（4/9/8）。その後、小林寛六郎（虎三郎の弟）や木村喜毅、清水卯三郎らの協力もあり（4/9/晦日、10/

24、11/3、12/15）、明治五年五月に刊行された。

清水卯三郎は、武蔵国北埼玉郡羽生町出身で、幕末の浪士組に参加した清水吾一の兄にあたる。慶応三年（一八六七）のパリ万国博覧会に参加し、西洋印刷技術を学んで帰国すると、浅草に西洋道具商「瑞穂屋」を開店、しばしば海舟と交流し、明治三年八月には、すでに「鶴殿草稿」の出版話を海舟から持ちかけられていた（『海舟日記』第八冊、明治三年八月十九日条）。

その他、静岡藩における土着・開墾の様子や海舟の家族のことなど、細かい点にこだわればきりがなが、これまでの記述で、明治四年前後の海舟とその周辺の動向はある程度明らかになったと考える。この時期の海舟は、公職についていたわけではなかったが、静岡藩や徳川家など多方面に影響力を及ぼし、一人であったからこそ多彩な活動を展開しえていたことがわかる。特に静岡藩と鹿児島藩との親密な交流は、海舟の存在ぬきには語ることができない。カリスマ性を持った一人の海舟が間に立っていたからこそ、双方の関係が良好であったといっても過言ではあるまい。

明治以降の「海舟日記」は、ともすれば得体の知れない人名の羅列が目立ち始め、気に留めなければ読み飛ばしてしまいがちになる。しかし、多彩な人物が登場するのも、「海舟日記」の持つ魅力のひとつである。関連文献をもとに個々の人物を追究し、海舟との関係に注目すること、思いもしなかった海舟の活動や立場も明らかにされるで

あろうし、その時代の多様な側面を見出す切っ掛けになるとも考える。とはいえ、本冊で調査できた人物は限られており、この日記の持つ魅力を十分に引き出せたかどうか、甚だ心許ない。本冊に登場しながら註記し得なかった人物、また註記しつつも誤記している箇所など、何かお気づきの点があれば、ご教示をいただければ幸いである。

一二九頁で書いた渡辺魯輔については、竹之内茂氏にご教示をいただきたい。記して御礼を申し上げます。

〈付属文書について〉

a 名刺 一枚（口絵写真8参照）

縦八・三 cm×横二・六 cm

「児玉順三郎」と書かれた名刺。本冊明治三年閏十月六日条の欄外に、「玉児順三郎」と記されるのに対応するだろう。児玉順三郎については不明。

b 名前書付 一枚（口絵写真9参照）

縦一一・四 cm×横六・五 cm

沼津兵学校資業生の中川錠蔵（将行）・矢吹恒蔵（秀二）・永峰矯四郎（秀樹）の名前が書かれた文書。鉛筆書きで海舟自筆ではない。本冊明治四年七月十三日・十四日条の記事と対応するが、当該期の文書

かどうか判断に苦しむ。

沼津兵学校は静岡藩が設けた陸軍士官学校で、明治二年正月に正式に開校した。資業生↓本業生↓得業生と進級する仕組みで、資業生とは基礎・教養課程の生徒である。試験に及第すれば進級できたが、明治四年の廃藩置県によって、沼津兵学校は兵部省に移管、翌五年五月に廃校となったため、資業生以外は誕生しなかった。

本冊からは、廃藩以前に資業生が自主退校している様子が散見できる。中川らもそうした面々であり、彼らは海軍を学びたいと海舟に相談している。中川は、明治四年に上京し、海軍兵学寮の教官となり、二十年以降は海軍水路部の観象台長をつとめた。近代数学教育に貢献し、多くの数学書を著した。矢吹は、一橋家家臣の養子となり徳川慶喜の床几廻警衛をつとめた人物。明治四年十二月に陸軍少尉、六年に中尉、工兵局長や工兵会議議長を歴任した。陸軍中将、男爵となる。永峰は、甲斐国北巨摩郡の修験・医師の子で、御家人の家を相続した。明治四年に上京し、中川らとともに海軍兵学寮の数学・英語教官として活躍した。『アラビアンナイト』などを翻訳をしたことでも知られる（以上は樋口雄彦『沼津兵学校の研究』、同『旧幕臣の明治維新』などを参照）。

c 覚書 一枚（口絵写真10参照）

縦七・八 cm×横三・三 cm

もともとは付箋として本冊に貼り付けられていたもの。詳細は、解

説の「1 書誌情報」を参照のこと。

(藤田英昭)

〈参考文献〉(人名註記・解説で使用了もの)

【史料・文献】

杉本勝二郎編『華族列伝 國乃礎』上中下(華族列伝國乃礎編輯所

一八九二・九三)

安井小太郎『故旧過訪録・遊徒及門録』(秀英舎 一八九七)

豊原又男『佐久間貞一小伝』(故佐久間貞一君胸像建設事務所 一

九〇四)

三田商業研究会編『慶応義塾出身名流列伝』(実業之世界社 一九

〇九)

武藤巖男『肥後先哲偉蹟後篇』(肥後先哲偉蹟後篇刊行会 一九二

八)

山崎有信『幕末血涙史』(日本書院 一九二八)

綿貫哲雄『維新前後の国事犯』二(『国家学会雑誌』四六―十一

九三二)

関口隆正『関口隆吉伝』(何陋軒書店 一九三八)

桑原羊次郎『飯塚納』(『伝記』八一五 一九四二)

橋本政次『姫路城史』下(姫路城史刊行会 一九五二)

加茂儀一『榎本武揚』(中央公論社 一九六〇)

河田烈自叙伝刊行会編『河田烈自叙伝』(同刊行会 一九六五)

高橋昌郎『中村敬字』(人物叢書 吉川弘文館 一九六六)

「人見寧履歴書」(茨城県農業史編さん会『農業史内部資料』十八

一九六七)

大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』二(名著刊行会 一九六七)

E・W・クラーク著・飯田宏訳『日本滞在記』(講談社 一九六七)

井黒弥太郎『榎本武揚伝』(みやま書房 一九六八)

我妻栄等編『日本政治裁判史録』明治・前(第一法規出版 一九六

八)

『静岡市史』近代・通史編史料編(静岡市 一九六九)

静岡県史料刊行会編『明治初期静岡県史料』四(静岡県立中央図書

館 一九七〇)

堀内信編『南紀徳川史』四(名著出版 一九七〇)

長井五郎『しみづうさぶらう略伝』(山本印刷 一九七〇)

大植四郎編著『明治過去帳(物故人名辞典)』(東京美術 一九七一

新訂)

植手通有編『西周 加藤弘之』(日本の名著 中央公論社 一九七

二)

勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集』十九(勁草書

房 一九七三)

『百官履歴』一・二(日本史籍協会叢書 東京大学出版会 一九七

三覆刻)

土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』(戸田書店 一九七三)

石井孝『勝海舟』(人物叢書 吉川弘文館 一九七四)

吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁「富田鉄之助伝」』(東京経済新

報社 一九七四)

寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』一（寺岡書洞 一九七六）
赤松範一編注『赤松則良半生談』（東洋文庫 平凡社 一九七七）
石橋純彦『沼津兵学校職員伝』（三）阿部潜君伝』（『同方会誌』八
立体社 一九七七復刻）

「故外山正一君小伝」（同右一五）

「本多晋」（同右二七）

中村松太郎「中村六三郎略伝」（同右五五 一九七八復刻）

『日本人名大事典』一〇六（平凡社 一九七九）

松岡英夫『大久保一翁』（中公新書 一九七九）

鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料 忠義公史料』六（鹿児島
島県 一九七九）

丸山信「草創期の慶応義塾と長岡藩士」（『福沢手帖』二二 一九七
九）

河野弘善『河島醇伝—日本勸業銀行初代総裁—』（河島醇伝刊行会
一九八二）

九

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館 一九八二）

勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』二・別巻（講談社 一九八二・
九四）

今井幸彦『坂本竜馬を斬った男—幕臣今井信郎の生涯—』（新人物
往来社 一九八三）

田中誠三郎『佐久間象山の実像』（銀河書房 一九八三）

梅溪昇「駐英公使館付武官時代の黒岡帯刀—とくに海軍軍制調査と
その意見を中心として—」（同『日本近代化の諸相』思文閣出版
一九八四）

梅溪昇「黒岡帯刀の英国留学について」（同右）

山田万作編『岳陽名士伝』（長倉書房 一九八五復刻）

倉沢剛「幕末教育史の研究」三（吉川弘文館 一九八六）

沼津市明治史料館編・発行『沼津兵学校』（展覧会図録 一九八六）
内海孝「ウォルシュ・ホール商会」（『横浜開港資料館館報・開港の
ひろば』一六 一九八六）

藩主人名事典編纂委員会編『三百藩藩主人名事典』一〇四（新人物
往来社 一九八六）

家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』一〇七（新人物
往来社 一九八七・八九）

西川武臣「ウォルシュ・ホール商会の番頭 松屋伊助と文書」（同
右二一 一九八七）

「御貸人」（『沼津市明治史料館通信』八 一九八七）

樋口雄彦「大築尚志略伝」（『沼津市博物館紀要』一一 一九八七）

坂本多加雄「山路愛山」（人物叢書 吉川弘文館 一九八八）

「静岡県史」資料編16・近現代一（静岡県 一九八九）

静岡新聞社出版局編『静岡県歴史人物事典』（静岡新聞社 一九九
一）

斎田作楽『花南丹羽賢』（太平文庫 太平書屋 一九九二）

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

二

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

樋口雄彦「史料紹介 矢田堀鴻「公私雑載」—明治四年の静岡藩士

- 日記―〔沼津市博物館紀要〕一五 一九九一
前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』一〇五（私家版 一九九一・九三・九七・二〇〇〇・〇七）
石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫 一九九二）
手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』一（柏書房 一九九二）
東京女子大学比較文化研究所編『木村熊二・鏡子往復書簡』（同研究所 一九九三）
中金武彦『奥平沓岐覚書』（『福沢手帖』七八 一九九三）
中金武彦『奥平沓岐から中金正衡へ―奥平沓岐覚書・その二―』（『福沢手帖』八十 一九九四）
高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』（中央公論美術出版 一九九四）
土居良三『軍艦奉行木村撰津守』（中公新書 一九九四）
我部政男・広瀬順昭編『国立公文書館所蔵 勅奏任官履歴原書・上巻』（柏書房 一九九五）
田口英爾『最後の箱館奉行の日記』（新潮選書 一九九五）
霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』上・下（霞会館 一九九六）
『英学者 蘭鑑』（『明治史料館通信』四七 一九九六年）
『静岡県榛原郡誌』復刻版（千秋社 一九九七）
大久保利謙編『津田真道 研究と伝記』（みすず書房 一九九七）

- 沼津市明治史料館編・発行『神に仕えたサムライたち―静岡移住旧幕臣とキリスト教―』（展覧会図録 一九九七）
辻達也『明治維新後の徳川宗家―徳川家達の境遇―』（『専修人文論集』六〇 一九九七）
『静岡県史』通史編5・近現代1（静岡県 一九九八）
前田匡一郎『徳川家臣の生きた道 林惟純（三郎）』（『産経新聞』連載 一九九八）
樋口雄彦『沼津兵学校関係人物履歴集成』（『沼津市博物館紀要』二二 一九九八）
山田博司『開拓使の組織と職員 2』（『研究紀要』一三 北海道立文書館 一九九八年）
東京都江戸東京博物館編・発行『没後一〇〇年勝海舟展』（展覧会図録 一九九九）
田口親『田口卯吉』（人物叢書 吉川弘文館 二〇〇〇）
相模原市立博物館編集・発行『幕末・維新の相模原―村の殿様・旗本藤澤次謙と村人たち―』（展覧会図録 二〇〇〇）
高原泉『開成所版『万国公法』の刊行―万屋兵四郎と勝海舟をめぐる―』（『中央大学大学院研究年報』二九・法学研究科篇 二〇〇〇）
〇）
慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』一（岩波書店 二〇〇一）
福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』（芙蓉書房出版 二〇〇一）
白井勝美ほか編『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館 二〇〇一）

宮崎修多「渡辺家資料について」(『国文学研究資料館報』五九 同館 二〇〇一)

前田匡一郎「徳川慶喜邸を訪ねた人々」(『徳川慶喜家扶日記』より)

(羽衣出版 二〇〇三)

市立市川歴史博物館編集・発行『幕末の市川』(『展覧会図録』二〇〇三)

「故浅野美作守履歴」(『旧幕府』四一七 マツノ書店 二〇〇三複製)

「戸川伊豆守小伝」(同右五一)

矢口祥有里「瀧村小太郎と岡田斧吉」(伊庭八郎研究会「秀頼会」

研究誌『残照』四 二〇〇三)

矢口祥有里「岡田家のその後」(同右)

江藤淳・松浦玲編『海舟語録』(講談社学術文庫 二〇〇四)

樋口雄彦「箱館戦争降伏人と静岡藩」(『国立歴史民俗博物館研究報

告』一〇九 二〇〇四)

樋口雄彦「旧幕臣の明治維新—沼津兵学校とその群像—」(吉川弘

文館 二〇〇五)

樋口雄彦「沼津兵学校関係人物履歴集成 その三」(『沼津市博物館

紀要』三〇 二〇〇六)

樋口雄彦『沼津兵学校の研究』(吉川弘文館 二〇〇七)

熊澤恵里子「幕末維新期における教育の近代化に関する研究」(風

間書房 二〇〇七)

沼津市明治史料館編集・発行『図説沼津兵学校』(『展覧会図録』二

〇〇九)

安岡昭男編『幕末維新大人名事典』(新人物往来社 二〇一〇)

松浦玲『勝海舟』(筑摩書房 二〇一〇)

柳川市史編集委員会編『図説 立花家記』(柳川市 二〇一〇)

樋口雄彦『静岡学問所』(静岡新聞社新書 二〇一〇)

栗原伸一郎「戊辰戦争期の仙台藩と肥後藩」(『市史せんだい』vol・

20 二〇一〇)

「海舟日記」の書誌情報と閲覧用マイクロフィルム情報

書 誌 情 報						マイクロフィルム情報		
資料番号	資料名	表紙色	料 紙	法量(mm) 丁数(墨付)	記 載 期 間	請求記号	検索№	コ マ
94201697	「海舟日記」1	淡青	「金花堂」 青野紙	185×127 50(50)	文久2年閏8月17日～文久3年3月16日 (1862.10.10～1863.5.3)	FKA/2/5	15	0001-0054
94201698	「海舟日記」2	青	無 銘 青野紙	176×122 100(100)	文久3年3月16日～同年10月3日 (1863.5.3～11.13)	FKA/2/5	16	0001-0105
94201699	「海舟日記」3	淡青	「金花堂」 青野紙	185×127 100(100)	文久3年10月3日～元治元年7月9日 (1863.11.13～1864.8.10)	FKA/2/5	17	0001-0110
94201700	「海舟日記」4	薄茶	「金花堂」 黒野紙	185×128 100(100)	元治元年7月10日～慶応元年8月28日 (1864.8.11～1865.10.17)	FKA/2/6	1	0001-0111
94201701	「海舟日記」5	茶	無 銘 青野紙	184×128 150(132)	慶応元年9月朔日～慶応3年2月25日 (1865.10.20～1867.3.30)	FKA/2/6	2	0001-0141
94201702	「海舟日記」6	薄茶	無 銘 黒無野	180×128 48(48)	慶応3年正月28日～慶応4年4月26日 (1867.3.4～1868.5.18)	FKA/2/6	3	0001-0060
94201703	「海舟日記」7	茶	無 銘 青野紙	182×125 96(96)	慶応4年4月28日～明治2年3月20日 (1868.5.20～1869.5.1)	FKA/2/6	4	0001-0109
94201704	「海舟日記」8	茶	「金花堂」 黒野紙	190×128 100(100)	明治2年3月21日～明治3年7月24日 (1869.5.2～1870.8.20)	FKA/2/6	5	0001-0108
94201705	「海舟日記」9	茶	「金花堂」 黒野紙	185×128 100(100)	明治3年10月24日～明治5年正月5日 (1870.11.17～1872.2.13)	FKA/2/6	6	0001-0110
94201706	「海舟日記」10	茶	無 銘 青野紙	176×128 96(96)	明治5年1月15日～明治7年1月20日 (1872.2.23～1874.1.20)	FKA/2/6	7	0001-0102
94201707	「海舟日記」11	薄茶	無 銘 青野紙	162×119 76(76)	明治7年1月21日～明治8年5月14日 (1874.1.21～1875.5.14)	FKA/2/6	8	0001-0099
94201708	「海舟日記」12	濃緑	無 銘 青野紙	181×125 96(96)	明治8年5月15日～明治9年12月3日 (1875.5.15～1876.12.3)	FKA/2/6	9	0001-0099
94201709	「海舟日記」13	紫	無 銘 青野紙	181×125 96(96)	明治9年12月4日～明治11年6月10日 (1876.12.4～1878.6.10)	FKA/2/6	10	0001-0101
94201710	「海舟日記」14	薄茶	無 銘 青野紙	152×107 93(93)	明治11年6月11日～明治12年9月23日 (1878.6.11～1879.9.23)	FKA/2/6	11	0001-0098
94201711	「海舟日記」15	茶	無 銘 青野紙	180×130 100(100)	明治12年9月24日～明治14年1月31日 (1879.9.24～1881.1.31)	FKA/2/7	1	0001-0103
94201712	「海舟日記」16	茶	無銘青野紙 二種合	182×130 158(151)	明治14年2月1日～明治15年12月31日 (1881.2.1～1882.12.31)	FKA/2/7	2	0001-0159
94201713	「海舟日記」17	茶	「山本製」 赤野紙	185×128 91(91)	明治16年1月1日～明治17年5月31日 (1883.1.1～1884.5.31)	FKA/2/7	3	0001-0094
94201714	「海舟日記」18	薄茶	無 銘 青野紙	185×132 95(95)	明治17年6月1日～明治18年10月9日 (1884.6.1～1885.10.9)	FKA/2/7	4	0001-0098
94201715	「海舟日記」19	薄茶	「秀香堂」 青野紙	180×127 92(87)	明治18年10月10日～明治19年12月31日 (1885.10.10～1886.12.31)	FKA/2/7	5	0001-0092
94201716	「海舟日記」20	茶	無 銘 青野紙	152×112 93(86)	明治20年1月1日～明治21年1月2日 (1887.1.1～1888.1.2)	FKA/2/7	6	0001-0091
94201717	「海舟日記」21	薄茶	「上 田」 青野紙	183×136 96(96)	明治21年1月1日～明治22年4月30日 (1888.1.1～1889.4.30)	FKA/2/7	7	0001-0102
94201718	「海舟日記」22	茶	「九十九」 赤野紙	183×122 90(90)	明治22年5月1日～明治23年4月12日 (1889.5.1～1890.4.12)	FKA/2/7	8	0001-0093
94201719	「海舟日記」23	茶	「自笑堂製十」 赤野紙	182×130 95(92)	明治23年4月12日～明治24年6月30日 (1890.4.12～1891.6.30)	FKA/2/7	9	0001-0100
94201720	「海舟日記」24	茶	「自笑堂製十」 赤野紙	182×130 96(96)	明治24年7月1日～明治25年9月22日 (1891.7.1～1892.9.22)	FKA/2/7	10	0001-0099
94201721	「海舟日記」25	茶	「喜久市」 青野紙	185×127 50(50)	明治25年9月24日～明治31年12月31日 (1892.9.24～1898.12.31)	FKA/2/7	11	0001-0054

*「海舟日記」は、当館7階の図書室にてマイクロリーダーで閲覧・複写ができます。

*閲覧希望の方は所定の「閲覧請求票」に請求記号等を記入して係員の申請して下さい。

*複写の料金は1枚30円で、1日1人100枚までとなっています。